

原町市埋蔵文化財調査報告書 第14集

# 原町市内遺跡発掘調査報告書 1

平成7年度試掘調査

泉廃寺跡（第2次調査）

牛渡前遺跡

相馬胤平居館跡

南町遺跡

高見町A遺跡

1997年3月

福島県原町市教育委員会

# 原町市内遺跡発掘調査報告書 1

平成7年度試掘調査

泉廃寺跡（第2次調査）

牛渡前遺跡

相馬胤平居館跡

南町遺跡

高見町A遺跡

1997年3月

福島県原町市教育委員会



# 序

文化財は、わが国の長い歴史のなかで生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、原町市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では埋蔵文化財の保護のため、開発が行なわれる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡の保存協議を行ない、保存が困難な場合については、図面や写真などによる記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成7年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の試掘調査の成果報告書です。今後この報告書を埋蔵文化財の保護、地域史の研究のために活用していただければ幸いに存じます。

終りに、地権者の皆様をはじめ調査に御協力いただきました方々に心から感謝いたします。

平成9年3月

原町市教育委員会

教育長 井村

寛



## 例 言

- 1 本報告書は、平成7年度に実施した原町市内遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 調査は、国及び県の補助金の交付を得て原町市教育委員会が実施した。
- 3 本報告書の執筆及び編集は、原町市教育委員会生涯学習部文化課 鈴木文雄、堀 耕平、荒 淑人が行なった。
- 4 試掘調査、報告書作成にあたり、次の機関および個人から指導助言を得ている。  
文化庁記念物課、福島県教育庁文化課、大塚初重、岡田茂弘、鈴木 啓、西 徹雄、  
玉川一郎
- 5 調査で得られた資料は、原町市教育委員会が保管している。



# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第 1 章 原町市をとりまく環境	1
第 1 節 地理的環境	1
第 2 節 歴史的環境	2
第 2 章 調査遺跡	5
第 3 章 試掘調査及び調査成果	6
第 1 節 泉廃寺跡（第 4 次調査）	6
第 2 節 牛渡前遺跡	9
第 3 節 相馬胤平居館跡	11
第 4 節 南町遺跡	14
第 5 節 高見町 A 遺跡	16
付 章 高見町 A 遺跡の火山灰分析（古環境研究所 早田 勉）	19

報告書抄録





# 第1章 原町市をとりまく環境

## 第1節 地理的環境

福島県原町市は、太平洋に面した浜通り地方の、阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯舘村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約50,100人、面積は約199.66km<sup>2</sup>で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するJR常磐線と国道6号線で、仙台方面や市内などへの通勤・通学の手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、太平洋岸の東部にいくにつれて標高が下がっていく。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯とは双葉断層(岩沼-久之浜構造線)によって地質的に明瞭に区分されている。

阿武隈高地は、東西約50km・南北約200kmの規模をもち、古生代から新生代中頃の新第三紀中新生に至る地質を含み、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原で、原町市西部での標高は500～650m前後になっている。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵(滝の口層)と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では標高20～30mを測る。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第1段丘、第2段丘と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む7段丘の存在が知られており、特に第1段丘である畦原段丘と第4段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布している。低丘陵の間には、標高20m以下の沖積平野が広がり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木2a式期の遺跡である萱浜の赤沼遺跡の調査では、当時の海岸線は、現在の標高6m前後と考えられている。市内の沖積平野は現在ではほぼ場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。

## 第2節 歴史的環境

原町市における旧石器時代の遺跡は、現在のところ9ヶ所が知られている。立地条件を概観すると、畦原A遺跡、熊下遺跡、袖原A遺跡などは太田川流域の第1段丘面(畦原段丘)上に所在し、陣ヶ崎A遺跡、西町遺跡、橋本町A遺跡、桜井遺跡などは新田川流域の第4段丘面(雲雀ヶ原扇状地)に所在している。

縄文時代の遺跡は早期末から前期初頭の住居跡が検出された片倉の八重米坂A遺跡、隣接する羽山B遺跡などが阿武隈高地裾部に所在している。太田川右岸の第1段丘面に所在する片倉の畦原F遺跡の調査では早期末から前期前葉の土坑3基が検出されている。この時期は、阿武隈高地裾部に立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地に所在する遺跡も知られている。前期初頭の大木2a式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬這遺跡は雲雀ヶ原扇状地の裾部の微高地上に所在しており、当該期の海岸線と環境を推定する上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木9～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約1km、第3段丘面上に立地する植松遺跡では、昭和52年(1977)に大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡1軒が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞C1～A式土器片を出土した片倉の羽山遺跡など多くの遺跡が市内各地に所在している。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市内では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、福島県浜通り地方北部の中期末葉の標式土器である桜井式土器を出土する桜井遺跡が知られているが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成している例や弥生土器や石庖丁が出土する例が報告されている。また、平成5年に調査した高見町A遺跡からは弥生時代の後期の十王台式土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が2軒発見されている。

古墳は、前方後方墳として東北第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳が新田川右岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群を構成している。桜井古墳は昭和58年(1983)に範囲確認調査が行なわれ、軸長約72mの墳丘部に幅約11.2mの周溝が巡っていたことが確認された。

他に昭和42年(1967)に、中太田所在の墳丘部軸長約40mの前方後円墳である与太郎内1号墳、高見町1丁目所在の墳丘部直径約12mの円墳である桜井古墳群高見町支群第1号墳の発掘調査が行なわれ、後者からは合わせ口を粘土で留める割竹形木棺の痕跡が確認された。平成5年(1993)の高見町A遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は確認できなかった

が、外郭直径約15m、幅約2mの円形の周溝1基が発見され、高見町第2号墳と命名されている(桜井古墳群高見町支群第2号墳)。この調査では塩釜式期の竪穴住居跡2軒が市内では初めて発見されており、この遺跡が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程を理解するうえで極めて重要であることを示している。

この他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地蔵堂古墳群、江井の西谷地古墳群、鶴谷の五治郎内古墳群などが所在している。

終末期になると、当地方でも横穴古墳が多く作られている。現在確認されている分布状況を見ると、新田川左岸の上北高平に北沢横穴群、京塚沢横穴群、新山前横穴群、北泉に大磯横穴群、地蔵堂横穴群、太田川左岸の上太田に道内迫横穴群、大甕に西迫東迫横穴群、雫に坂下横穴群、太田川右岸の高には、昭和40年(1965)に調査された高林古墳群などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、高塚古墳の分布のあり方とほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群、羽山横穴群、上太田の新橋横穴群は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。このうち、昭和48年(1973)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴は、玄室奥壁・側壁・天井部に壁画が描かれており、調査後に保存処理を施して年4回の一般公開を通して社会教育に役立てている。

奈良・平安時代の遺跡は、律令体制のもとに行方郡衙に推定されている泉麿寺跡や軍団跡の可能性が指摘されている植松麿寺跡が新田川左岸の丘陵裾部に所在しているが、これらの遺跡からは瓦が出土しており、供給源として泉麿寺跡は大甕の京塚沢瓦窯跡が、植松麿寺跡は昭和59年(1984)に発掘調査が行なわれた入道迫瓦窯跡が考えられている。この他、馬場の滝ノ原遺跡では平安時代の須恵器窯跡3基が調査され、杯・長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢の丘陵の一角には大規模な製鉄遺跡が所在している。平成元年度から5年度までに、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉123基・鍛冶炉16基・木炭窯140基・竪穴住居跡121軒・掘立柱建物跡10棟など全国最大規模の製鉄遺跡であり、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する遺跡が増加するが調査例は少ない。立地の変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の<sup>おしお</sup>押雄神社・<sup>さかみね</sup>冠嶺神社を中心とする北長野一帯、<sup>たか</sup>多珂神社・<sup>ひまつり</sup>日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面にこの時期の遺跡が多く所在している。大甕地区は場整備事業に関連して平成2年に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒が確認されており、平成4年には上北高平の高松B遺跡でも奈良・平安時代と推定される竪穴住居跡2軒が試掘調査により確認されている。

中世の遺跡として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確なものも多い。その中でも、北泉の泉館跡は、中世山城の典型的な形態をとどめている。相馬氏の一族である泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっ

ている。他にも、牛越城跡・大甕七館の一つである明神館跡・相馬氏の奥州下向の際、最初の拠点となった別所の館跡などが比較的良好な中世山城の形態を残して所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、太田川左岸の自然堤防上に立地する、米々沢の谷地畑遺跡はその可能性が高い。平成2年に範囲確認調査が実施され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、中世から近世にかけての遺跡と推定される。

近世の遺跡として、慶長2年(1597)から8年(1603)まで相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手と野馬追原の出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmにわたって築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在では野馬土手の多くが消滅しており、その保護が急がれるが、昭和62年(1987)の桜井野馬土手の範囲確認調査及び、平成5年の牛来の歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と野馬追原の内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿を明瞭にとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡である。

近世後半から近代の遺跡としては藩営の大規模な製鉄遺跡として馬場鉄山があり、周辺の小規模な製鉄遺跡としては財団法人福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山B遺跡、片倉の羽山B遺跡が阿武隈高地の山間部に遺されている。

#### 参考文献

- 1965 竹島國基他 『原町市高林古墳群調査報告書』 原町市教育委員会
- 1969 竹島國基他 『原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告』 原町市教育委員会
- 1974 渡辺一雄他 『羽山装飾横穴発掘調査概報』 原町市教育委員会
- 1983 長島雄一 『赤沼遺跡試掘調査報告』 原町市教育委員会
- 1985 玉川一郎 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会
- 1988 玉川一郎 『野馬土手跡範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会
- 1990 玉川一郎・小野田義和 『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』 原町市教育委員会
- 1991 玉川一郎・西谷 勉 『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』 原町市教育委員会
- 1993 武田耕平 『(仮称)福島県立浜通り高等技術専門校建設関連遺跡発掘調査報告書(巢掛場遺跡)』 原町市教育委員会
- 1994 武田耕平 『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書(畦原F遺跡)』 原町市教育委員会
- 1996 堀 耕平 『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書(原遺跡)』 原町市教育委員会
- 辻 秀人 『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』 東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会

## 第2章 調査遺跡

原町市における近年の埋蔵文化財調査の傾向としては、ガットのウルグアイラウンド対策を盛り込んだ大型のほ場整備事業関連の調査件数・調査面積が大半を占める状況にあるが、その他各種開発に関連する調査が増えつつある。

平成7年度の本事業にかかる調査遺跡は5遺跡である。県営ほ場整備事業関連では、市内泉地区の泉廃寺跡(第2次調査)、高平地区の牛渡前遺跡・相馬胤平居館跡の3遺跡がある。店舗建設関連では南町1丁目所在の南町遺跡がある。また、福島県浜通り地方北部の弥生時代中期土器(桜井式土器)の標式遺跡である高見町1丁目所在の高見町A遺跡については、遺跡の範囲及び内容確認のための調査である。



- |        |          |           |
|--------|----------|-----------|
| 1 泉廃寺跡 | 2 牛渡前遺跡  | 3 相馬胤平居館跡 |
| 4 南町遺跡 | 5 高見町A遺跡 |           |

図1 遺跡位置図

0 2km  
(1/50000)

# 第3章 試掘調査及び調査成果

## 第1節 泉廃寺跡(遺跡番号20600097)(第2次調査)

所在地 原町市泉字町池・宮前・寺家前・町

調査期間 平成7年4月12日から8月12日まで

調査面積 4,000㎡

事業種別 県営ほ場整備事業にかかる遺跡の保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 堀 耕平

### 遺跡概要

遺跡は、新田川左岸の沖積地から河岸段丘面に立地する。古代の瓦や炭化米が出土し、建物跡の礎石が点在することから、古代の寺院跡として、昭和30年(1955)に福島県の史跡指定を受けた。近年では、古代行方郡の郡衙跡との見方が有力である。遺跡の推定面積は約120,000㎡、そのうち史跡指定面積は約47,000㎡である。昭和40年(1965)に、県立原町高等学校の郷土史研究部が礎石等の分布調査を行なった以外は、遺跡の範囲や内容についての発掘調査は実施されていない。平成6年度になり、遺跡の南側の範囲についての試掘調査が行なわれ、奈良・平安時代に推定される掘立柱建物跡などが検出された。

### 調査概要

平成6年度に実施した試掘調査(第1次調査)により掘立柱建物跡が検出された水田とその東側の水田について、トレンチ調査ではなく面的な調査を行なった。

### 調査成果

遺構 奈良・平安時代の掘立柱建物跡6棟、一本柱列2列

遺物 奈良・平安時代の土師器、須恵器、瓦

### 所 見

奈良・平安時代の遺物が多いこと及び掘立柱建物跡の検出から、遺構の時期は平安時代ごろと推定される。とくに注目されるのは東側の一本柱列が区画施設と考えられることから、官衙的な様相を呈していることである。隣地は古代寺院跡に関連する遺跡として県の指定史跡にもなっている重要な遺跡であるが、今回官衙的な様相を呈する遺構が発見されていることから、古代行方郡衙跡の可能性が高い。

以上のことから、泉廃寺跡は、将来にわたって保存すべきものと判断される。また、遺跡の範囲についてはさらに確認していくことが求められる。

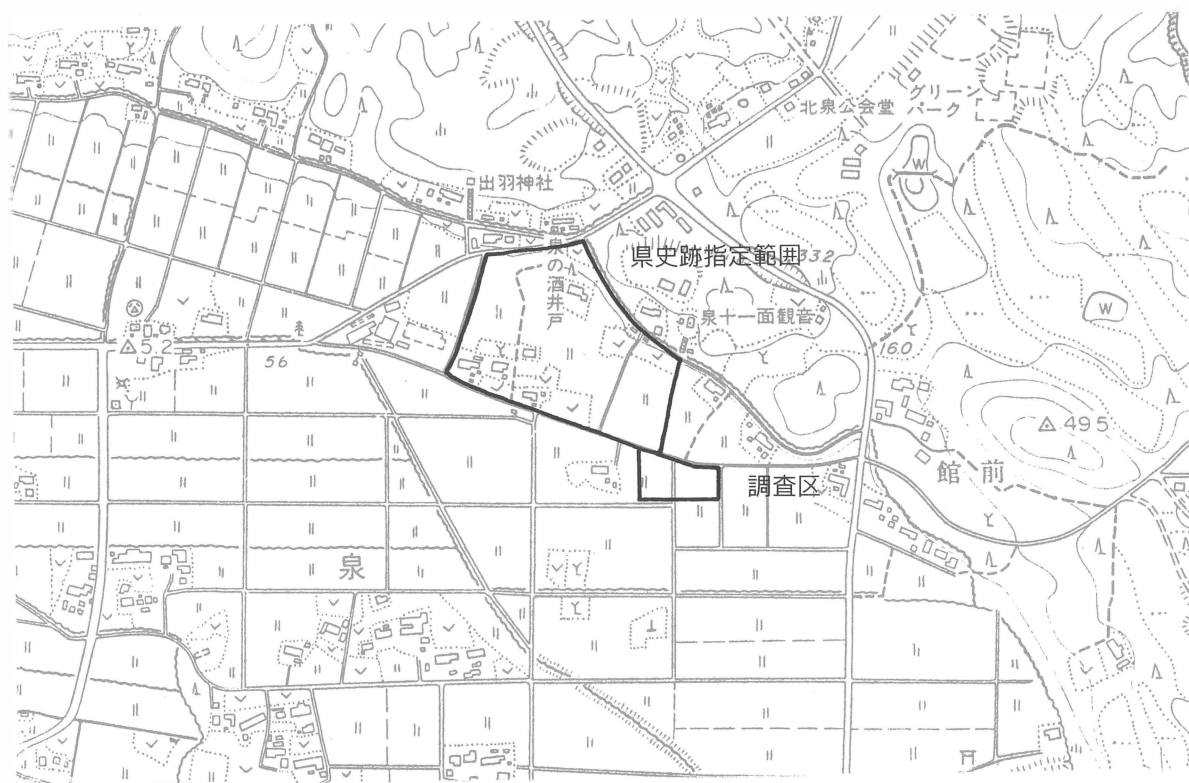


図2 調査区位置図

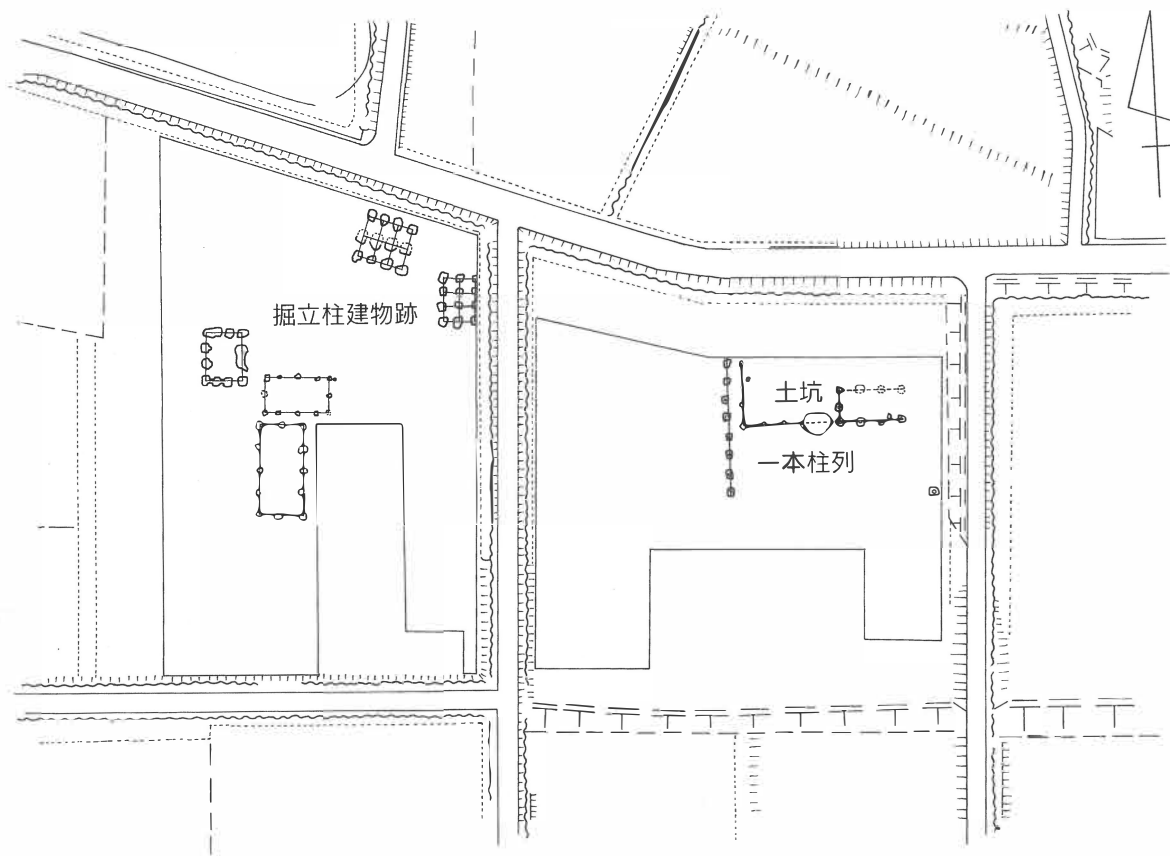


図3 遺構配置図



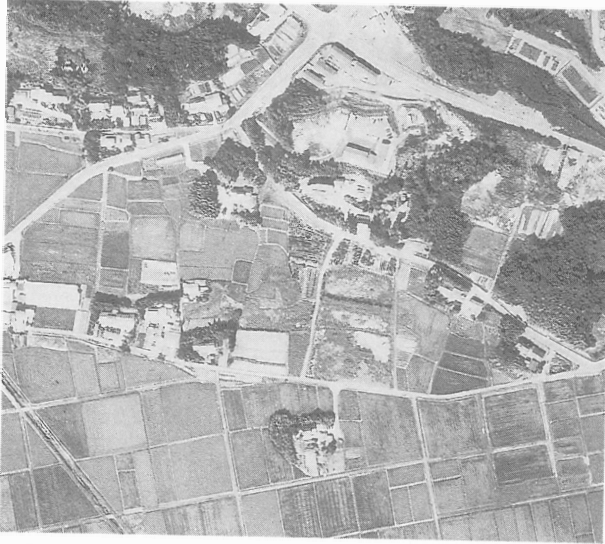


写真1 遺跡全景(上が北)



写真2 調査区全景(西から)



写真3 一本柱列(北西から)



写真4 掘立柱建物跡(北西から)



写真5 一本柱列掘方(南から)



写真6 一本柱列掘方(南から)

## 第2節 牛渡前遺跡(遺跡番号20600034)

所在地 原町市下北高平字赤字津木・下高平字荒井前

調査期間 平成7年7月17日から9月11日まで

調査面積 1,000m<sup>2</sup>

事業種別 県営ほ場整備事業にかかる保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 鈴木文雄

### 遺跡概要

遺跡は新田川左岸の沖積地に立地する。かつて石庖丁が採集されており、弥生時代の遺跡である。遺跡の推定面積は約15,500m<sup>2</sup>である。

### 調査概要

2×10mのトレンチを43か所設定し遺構検出を行なった。南西側のトレンチから土師器などの破片が出土したことから、南側にはさらに7か所のトレンチを設定した。

### 調査成果

遺構 検出されなかった。

遺物 奈良・平安時代の土師器・須恵器

### 所見

遺物が出土した南側の土層は、耕作土の下が黒褐色の軟質土で、元来は谷地のような状況であったと考えられる。遺物は河川の氾濫などの二次的な要因で周辺から流れ込んだものと考えられる。当初は弥生時代の遺物の出土が予想されたが、奈良・平安時代の土師器・須恵器が少量出土したのみであった。遺構は発見されなかった。

開発にあたっては慎重な工事を要する。



写真7 遺跡近景(南西から)



写真8 46号トレンチ(南から)



写真9 調査風景(南から)



写真10 須恵器杯(34号トレンチ出土)

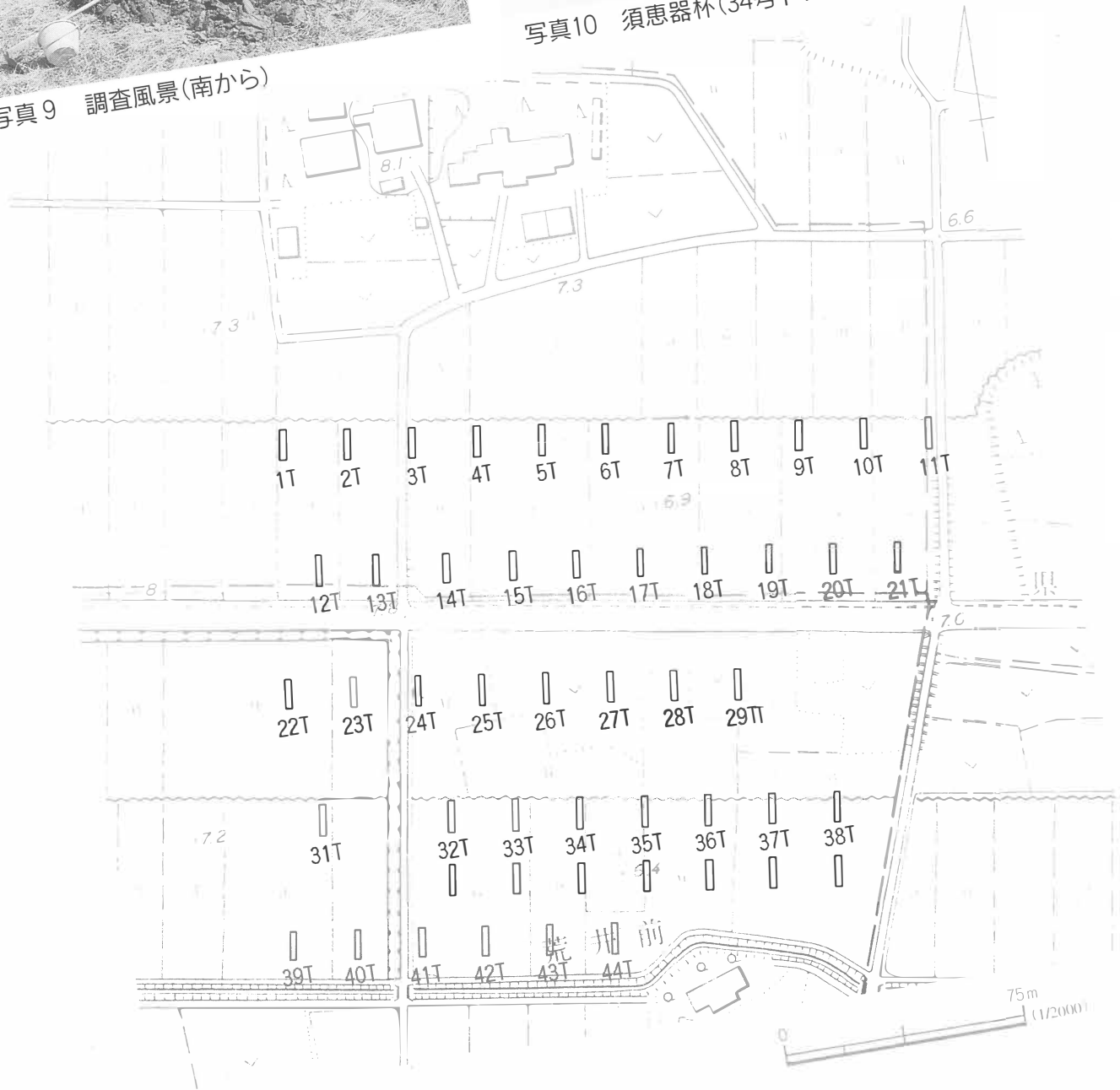


図4 トレンチ配置図

### 第3節 相馬胤平居館跡(遺跡番号20600272)

所在地 原町市下高平字荒井前・牛渡前・川原

調査期間 平成7年9月1日から9月12日まで

調査面積 3,600m<sup>2</sup>

事業種別 県営ほ場整備事業にかかる保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 鈴木文雄

#### 遺跡概要

遺跡は新田川左岸の沖積地に立地する。遺跡の南西端に「嘉元2年(1304)」銘の板碑がある。付近に相馬氏の一族、相馬胤平の居館があったとされることから遺跡名となった。遺跡の推定面積は約21,000m<sup>2</sup>である。

#### 調査概要

2×10mの大きさを基本にトレンチを23か所設定し、遺構検出を行なった。大型の竪穴住居跡をはじめ、幅5m前後の溝跡が検出された。溝跡の方向を確認するため、トレンチの拡張を行なった。

#### 調査成果

遺構 古墳時代前期の竪穴住居跡1軒・土坑1基

平安時代の竪穴住居跡2軒・鍛冶遺構1基・溝跡2条

近代の井戸跡2基・土坑6基・焼土跡1基

時期不明溝跡2条

遺物 古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器・須恵器・羽口・鉄滓、近代の陶磁器

#### 所見

今回の調査対象区域(微高地)全体が、古墳時代前期及び平安時代の遺跡の範囲と判断される。開発に際しては、工法対応が望ましいが、困難な場合には発掘調査が必要である。



写真11 遺跡近景(北東から)



写真12 古墳時代前期住居跡(S11)(南東から)



写真13 古墳時代前期住居跡(S11)遺物出土状況(北から)



写真14 古墳時代前期住居跡(S11)遺物出土状況(北から)



写真15 平安時代溝跡(SD2)(南から)



写真16 平安時代溝跡(SD2)(南西から)



写真17 溝跡(SD3・SD4)(東から)



写真18 平安時代ピット群(PG1)(北から)

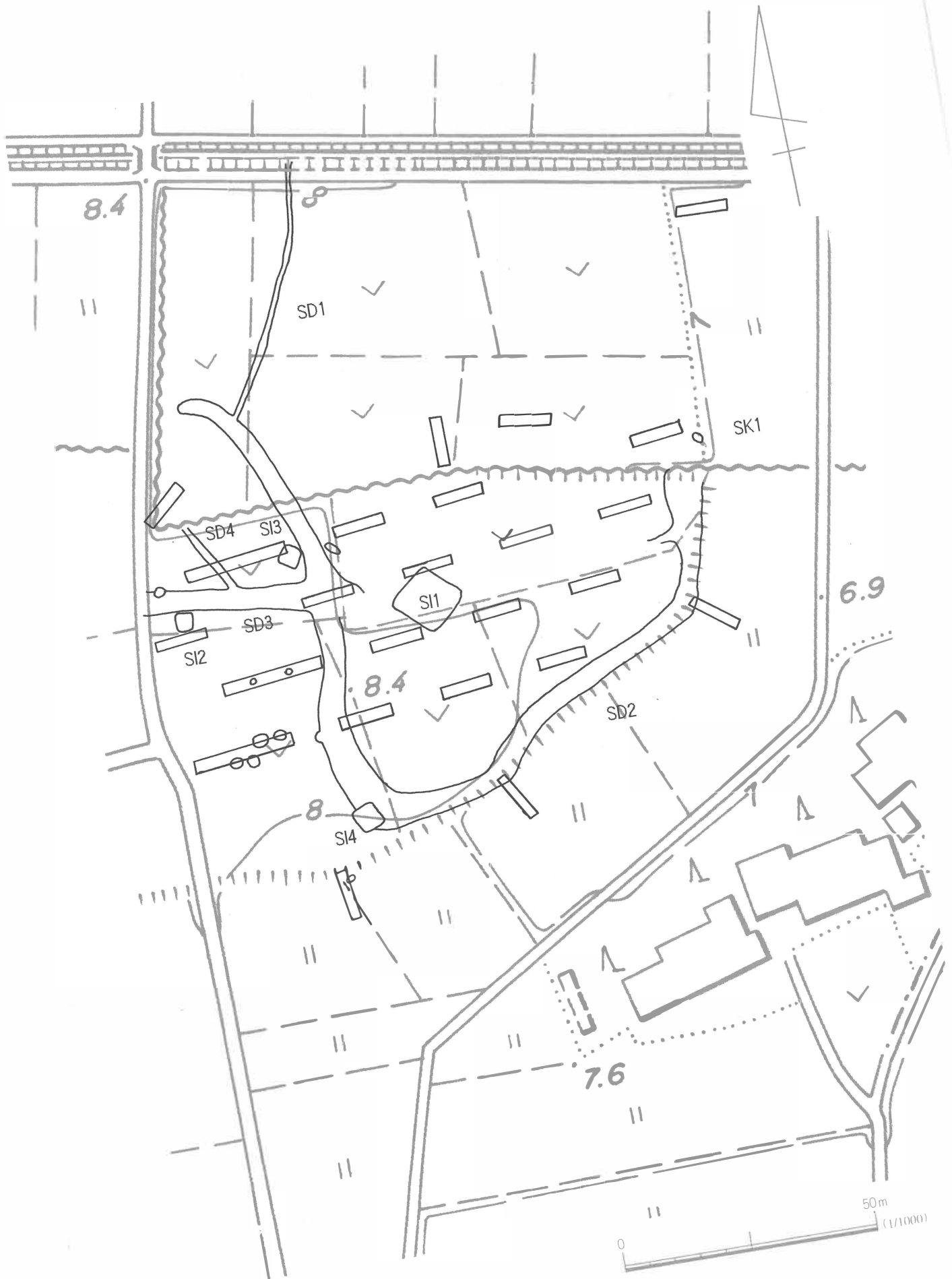


図5 遺構配置図

## 第4節 南町遺跡(遺跡番号20600039)

所在地 原町市南町1丁目

調査期間 平成7年9月28日から10月12日まで

調査面積 100m<sup>2</sup>

事業種別 店舗建設にかかる保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 堀 耕平

### 遺跡概要

遺跡は、新田川右岸の沖積地に立地する。遺跡の西側からかつて旧石器時代の石器が採集されている。江戸時代には原町宿から野馬原に通じる木戸跡(原町木戸)及び一里塚がこの周辺にあったといわれている。遺跡の推定面積は約4,200m<sup>2</sup>である。

### 調査概要

2×10mの大きさを基本にトレンチを4か所設定し、地表下1.3~1.9mの第四紀洪積世の黄褐色土層まで掘り下げて遺構及び旧石器時代の遺物の検出に努めた。

### 調査成果

遺構 検出されなかった。

遺物 近代・現代の陶磁器

### 所見

旧石器時代の遺物及び江戸時代の木戸跡・一里塚に関連する遺構・遺物は検出されなかったが、開発に際しては慎重な工事を要する。

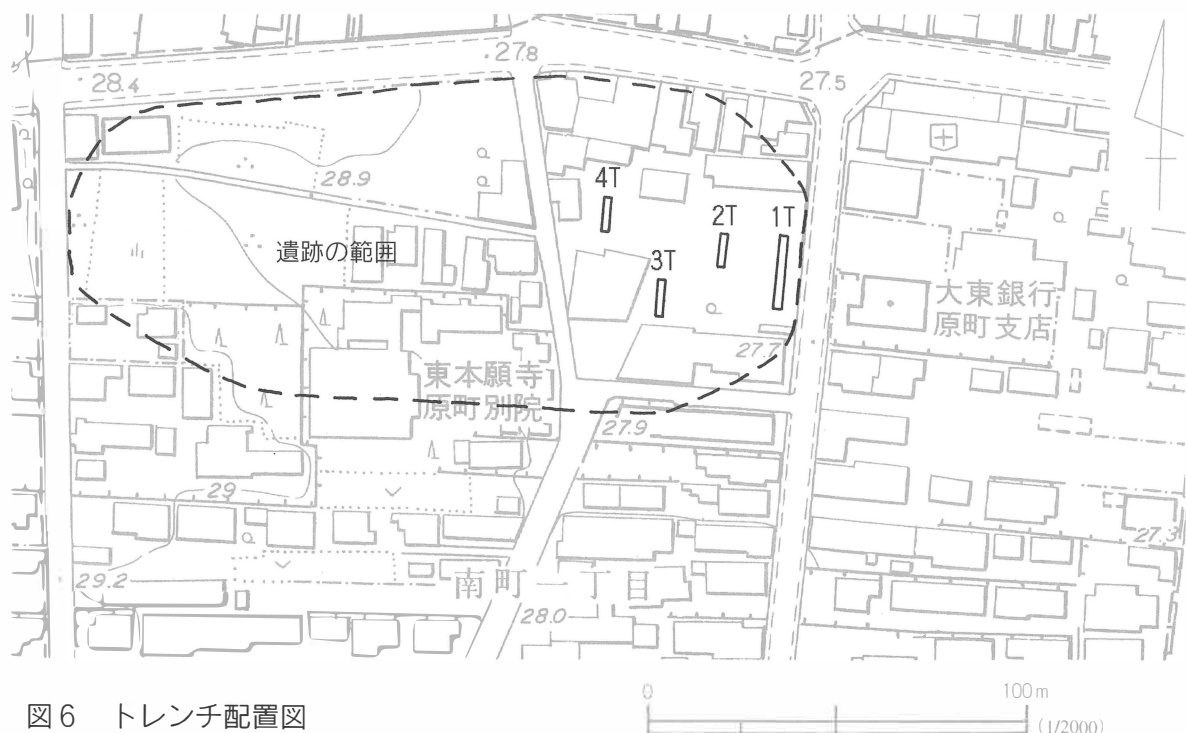


図6 トレンチ配置図



写真19 遺跡近景(東から)



写真20 1号トレンチ(南から)



写真21 2号トレンチ(北から)

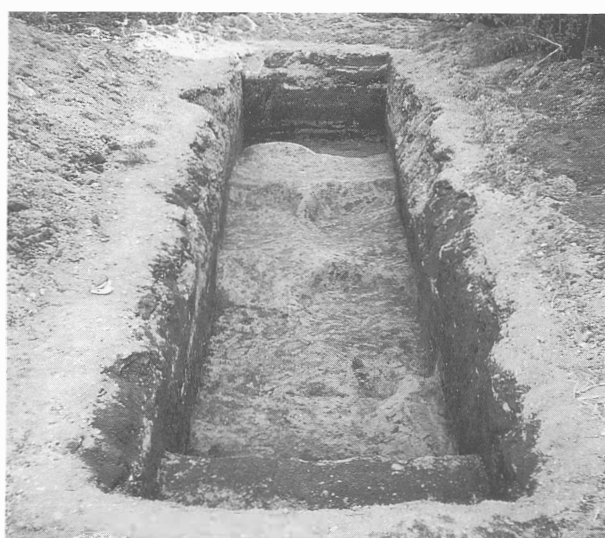


写真22 3号トレンチ(北から)

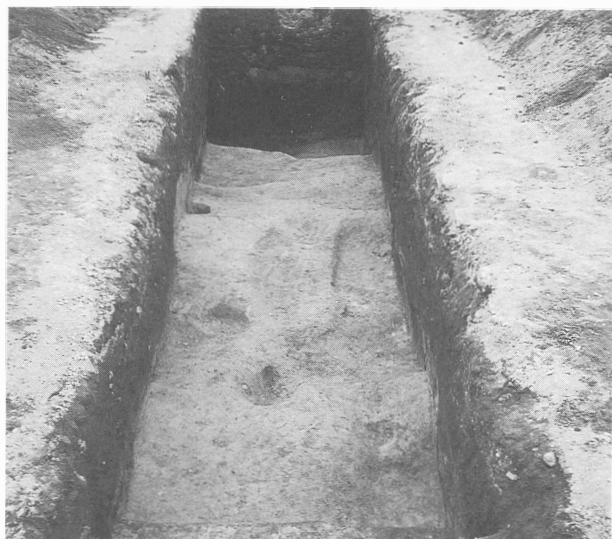


写真23 4号トレンチ(南から)



写真24 遺跡近景(西から)



## 第5節 高見町A遺跡(遺跡番号20600215)

所在地 原町市高見町1丁目  
調査期間 平成7年4月24日から8月30日まで  
調査面積 1,010m<sup>2</sup>  
事業種別 範囲及び内容確認のための試掘調査  
調査担当 鈴木文雄

### 遺跡概要

本遺跡は、原町市北部を東流する新田川右岸の河岸段丘上に位置している。標高は約14mである。本遺跡は旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代の複合遺跡である。特に本遺跡一帯は弥生時代中期の浜通り地方北部の標式土器である桜井式土器の標式遺跡にもなっている。遺跡の東には大型の前方後方墳である国指定史跡桜井古墳が位置し、高見町支群と上渋佐支群からなる桜井古墳群を形成している。なお、桜井古墳は現在、史跡整備中である。発掘調査はこれまで3次にわたり実施されている。昭和42年(1967)に原町市教育委員会が高見町支群1号墳の主体部を調査している。平成5年(1993)には市教育委員会が調査主体、東北学院大学の辻秀人助教授が調査担当で発掘調査が行なわれ、弥生時代後期(十王台式期)の竪穴住居跡2軒、古墳時代前期(塩釜式期)の竪穴住居跡2軒、円墳の周溝1基が検出されている。

### 調査概要

2×10mの大きさを基本にトレンチを16か所設定し遺構検出を行なった。古墳の周溝及び住居跡が発見されたため、トレンチを拡張した。また、古墳周溝覆土の火山灰分析を行なった。

### 調査成果

遺構 弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡21軒

古墳時代の古墳(円墳) 8基・刳抜石棺1基・箱式石棺1基

江戸時代の野馬土手1条

遺物 縄文土器、弥生土器・石庖丁・磨製石斧、古墳時代の土師器、平安時代の須恵器・鉄滓

### 所見

桜井式土器の標式遺跡として多数の住居跡が確認された。古墳時代前期の住居跡も多く、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡として重要な遺跡であることが再確認された。墳丘は削平されているが、古墳の存在も多数確認され、古墳群としても重要な地区である。刳抜石棺は小児用の棺と考えられるが、小高町の浦尻古墳で1基、浪江町の高塚古墳群で2基、いわき市の神谷作古墳群で1基を数える程度で出土例は少なく、貴重な発見である。また、江戸時代に築かれた野馬土手に伴う堀跡も検出されている。周溝覆土の火山灰分析により、6世紀中葉に噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の降下を確認され(古環境研究所 早田 勉氏の調査による)、古墳の築造時期は6世紀中葉以前と考えられる。

以上のことから、本遺跡は将来にわたり保存することが望ましいと判断される。保存が困難な場合には発掘調査が必要である。

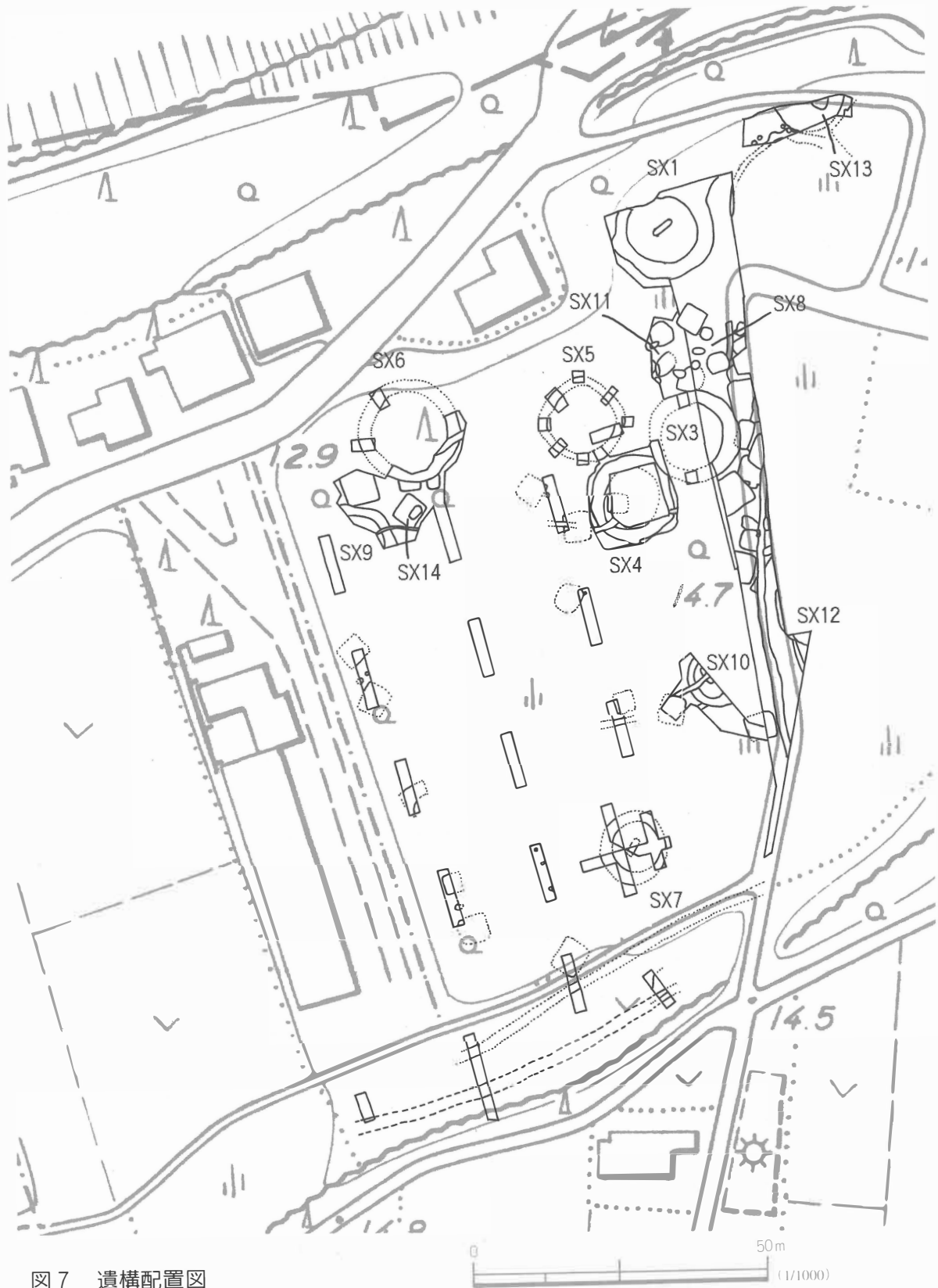


図7 遺構配置図

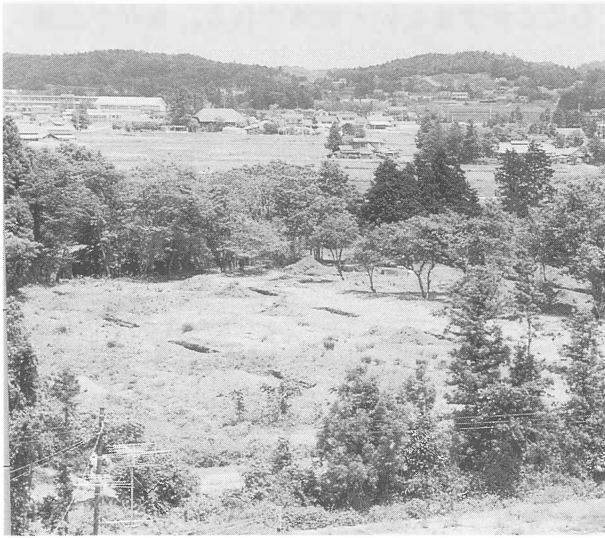


写真25 遺跡近景(南から)



写真26 遺跡近景(北から)



写真27 古墳(SX4)・住居跡(S120)(南から)



写真28 古墳(SX6・9・14)・住居跡(S119・27)(南から)



写真29 古墳(SX14箱式石棺)(南東から)



写真30 古墳(SX10)・住居跡(S125)(南西から)

# 付 章 高見町 A 遺跡の火山灰分析

早田 勉 (古環境研究所)

## 1. はじめに

福島県浜通り地方の火山灰土中には、すでに噴出年代が明らかにされているテフラ(火山碎屑物, いわゆる火山灰)が分布している。そこで高見町 A 遺跡の発掘調査でも、地質調査と土層についてのテフラ検出分析を行い、示標テフラの層位を明らかにして、古墳の築造年代に関する資料を得ることにした。調査の対象とした地点は、SX 7 (第 7 号墳)周溝部、SX 5 (第 5 号墳)墳丘盛土部、SX 5 周溝部、SX 1 (第 1 号墳)周溝部の 4 地点である。

## 2. 土層の順序

### (1) SX 7 周溝部

SX 7 の周溝覆土中には、層厚 1.5cm の白色粗粒火山灰層が認められる(図 1)。

### (2) SX 5 墳丘盛土部

この地点では、下位より褐色土(層厚 3 cm 以上)、暗褐色土(層厚 8 cm)、黒灰色土(層厚 27cm)、暗灰色土(層厚 7 cm)、暗褐色土(層厚 17cm)、褐色土(層厚 11cm, 墳丘盛土)、暗褐色表土(層厚 13cm) の連続が認められる(図 2)。

### (3) SX 5 周溝部

ここでは、下位より褐色土(層厚 19cm)、暗褐色土(層厚 17cm)、暗褐色砂質土(層厚 7 cm) が認められる(図 3)。

### (4) SX 1 周溝部

この地点では、下位より暗褐色土(層厚 10cm)、若干色調の黒い暗褐色土(層厚 17cm)、若干色調の黒い暗褐色砂質土(層厚 10cm)、暗褐色土(層厚 23cm)、黒色土(層厚 21cm)、黒褐色土(層厚 31cm) が認められる(図 4)。

## 3. テフラ検出分析

### (1) 分析試料と分析方法

噴出年代が明らかにされている示標テフラを検出するために、基本的に 5 cm ごとに採取された試料のうち、5 cm おきの試料、合計 13 点を対象にテフラ検出分析を行った。テフラ検出分析の手順は、次のとおりである。

- 1) 試料 10 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 80℃で恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

## (2) 分析結果

SX 7 周溝試料番号 1 の火山灰層には、白色軽石が特に多く認められた(表 1)。軽石はスポンジ状に比較的良好に発泡しており、その最大径は1.2mmである。斑晶には角閃石がみとめられる。SX 5 墳丘盛土部では、軽石粒子は検出されなかった。一方その周溝部では、試料番号 1 に比較的多くの白色軽石が認められる。軽石はスポンジ状に比較的良好に発泡しており、その最大径は1.0mmである。斑晶には角閃石が認められる。さらにSX 1 の試料番号 1 にも、多くの白色軽石が認められる。軽石はスポンジ状に比較的良好に発泡しており、その最大径は1.2mmである。斑晶には角閃石が認められる。

## 4. 考察

SX 7、SX 5、SX 1 の 3 古墳の周溝覆土中に検出された白色軽石は、その岩相および斑晶鉱物から、6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 荒井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に由来すると考えられる。墳丘盛土の下位に軽石は認められなかったことから、古墳の構築は 6 世紀中葉を遡ると推定される。

なお、SX 5 や SX 1 では、Hr-FP 降灰層準と考えられる試料の下位にも、白色軽石が少量ずつ検出された。斑晶には角閃石が認められる。これらの軽石については、上位から何らかの作用により混入した Hr-FP の可能性が大きいと考えられる。なお新地町大森 A 遺跡の発掘調査では、Hr-FP の下位に 6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) が検出されている(福島県教育委員会ほか, 1990)。したがって、今回高見町 A 遺跡において Hr-FP 層準より下位の試料から検出された白色軽石が、Hr-FA に由来する軽石である可能性も完全には否定できない。ただし、現段階において、Hr-FP および Hr-FA の両者の一次堆積層としての検出以外の場合に、両者を明瞭に識別できる示標は得られていない。

## 5. まとめ

高見町 A 遺跡の SX 5、SX 7、SX 1 の 3 古墳の墳丘盛土の下位の土壌および周溝覆土について地質調査を行ない、土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析を行なった。

その結果、いずれの古墳においても周溝覆土中に榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6 世紀中葉)に由来する軽石が検出された。このことから、少なくともこれら 3 古墳の構築は 6 世紀中葉を遡るものと推定された。また Hr-FP の下位には、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6 世紀初頭)の可能性のある軽石が検出された。より詳細な編年研究のために今後さらにテフラに関する調査分析を行ない、原町市域の示標テフラについての試料を増加させていく必要がある。

## 文献

新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79

新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52

町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

坂口 一(1986) 榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312

福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団(1990) 相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ.

表1 高見町A遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
SX7周溝	1	++++	白	1.2
SX5墳丘盛土部	2	-	-	-
	4	-	-	-
	6	-	-	-
	8	-	-	-
	10	-	-	-
SX5周溝部	1	++	白	1.0
	3	+	白	0.7
	5	-	-	-
	7	-	-	-
SX1周溝部	1	+++	白	1.2
	3	+	白	0.8
	5	-	-	-

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 軽石の最大径は, mm.

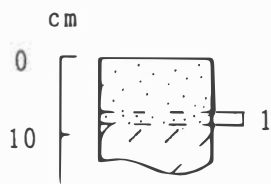


図 1 高見町 A 遺跡 SX7 周溝部の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

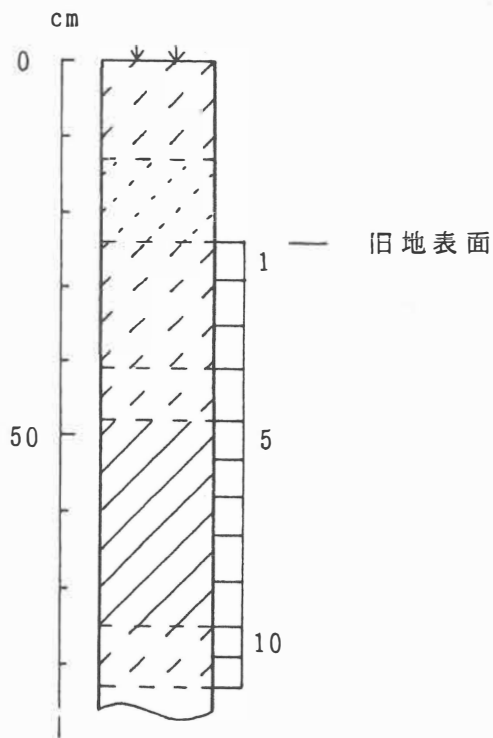
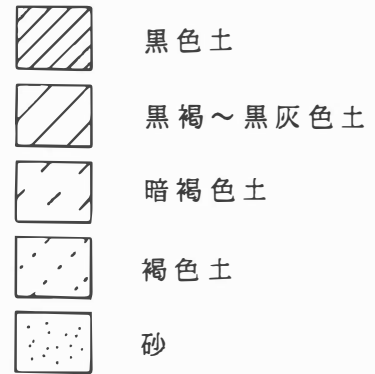


図 2 高見町 A 遺跡 SX5 墳丘部の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

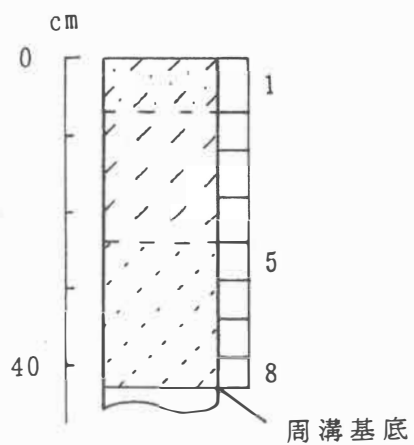


図 3 高見町 A 遺跡 SX5 周溝部の土層柱状図  
 数字はテフラ分析の試料番号

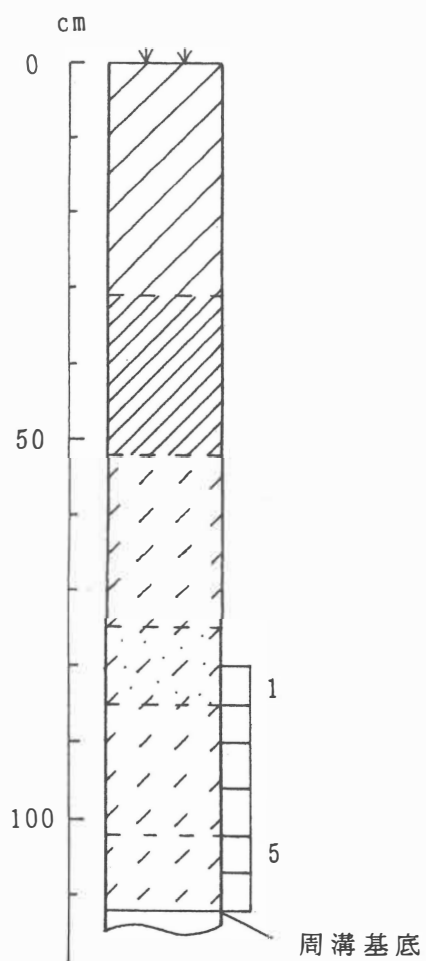


図 4 高見町 A 遺跡 SX1 周溝部の土層柱状図  
 数字はテフラ分析の試料番号



報 告 書 抄 録

ふりがな	はらまちしないいせきはくつちょうさほうこくしょ いち						
書名	原町市内遺跡発掘調査報告書 1						
副書名	平成7年度試掘調査 泉廃寺跡 (第2次調査) ・牛渡前遺跡 ・相馬胤平居館跡 ・南町遺跡 ・高見町A遺跡						
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第14集						
編著者名	鈴木文雄・堀 耕平・荒 淑人						
編集機関	福島県原町市教育委員会生涯学習部文化課						
所在地	〒975 福島県原町市三島町2丁目45番地 TEL0244 (24) 5284						
発行年月日	西暦 1997年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
いずみはいじあと 泉廃寺跡 (第2次調査)	ふくしまけんはらまちしいずみあざまちいけ 福島県原町市泉字町池 みやまえ てらけまえ まち ・宮前・寺家前・町	07206 00097	37° 39' 50"	141° 00' 50"	19950412 ～ 19950812	4000	県営ほ場 整備事業
うしわたまえいせき 牛渡前遺跡	はらまちし しもきたかひらあざあかう 原町市下北高平字赤字 つぎ しもたかひらあざあらいまえ 津木・下高平字荒井前	07206 00034	37° 38' 50"	141° 59' 45"	19950717 ～ 19950911	1000	県営ほ場 整備事業
そうまたねひらきよかん 相馬胤平居館 あと跡	はらまちし しもたかひらあ であらいまえ 原町市下高平字荒井前 うしわたまえ かわはら ・牛渡前・川原	07206 00272	37° 38' 45"	141° 59' 35"	19950901 ～ 19950912	3600	県営ほ場 整備事業
みなみまちいせき 南町遺跡	はらまちしみ ぬまちいっちようめ 原町市南町1丁目	07206 00039	37° 38' 05"	141° 57' 40"	19950928 ～ 19951012	100	店舗建設
たかみちようえいせき 高見町A遺跡	はらまちしたかみちよういっちようめ 原町市高見町1丁目	07206 00215	37° 38' 15"	141° 59' 25"	19950424 ～ 19950830	1010	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
泉廃寺跡 (第2次調査)	官衙跡	奈良・鞍馬	掘立柱建物跡6棟、 一本柱列2列		土師器、須恵器、 瓦	県史跡	
牛渡前遺跡	散布地	奈良・鞍馬			土師器、須恵器		
相馬胤平居館跡	城館跡 散布地	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡1軒 竪穴住居跡2軒、鍛冶遺構1基、溝1条		土師器 土師器・須恵器・羽口・鉄滓		
南町遺跡	散布地	旧石器時代					
高見町A遺跡	集落跡 古墳	弥生時代 古墳時代 平安時代 江戸時代	竪穴住居跡21軒 古墳8基、朝飯石棺1基、箱式石棺1基 野馬土手1条		弥生土器、石庵丁、磨製石斧 土師器 須恵器	桜井式土器 の標式遺跡	

原町市埋蔵文化財調査報告書 第14集

原町市内遺跡発掘調査報告書 1

平成9年3月31日 発行

発行 福島県原町市教育委員会  
〒975 福島県原町市本町二丁目27番地

印刷 有限会社ライト印刷  
〒975 福島県原町市北新田字信田370番地-1